

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 2 日現在

機関番号：32645

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2016

課題番号：25770143

研究課題名(和文)ドイツ語における否定概念表現の通時的研究 nichtとkeinの文法化を中心に

研究課題名(英文) Diachronic investigations of negative expressions in German - focusing on the grammaticalization of nicht and kein

研究代表者

西脇 麻衣子 (NISHIWAKI, Maiko)

東京医科大学・医学部・講師

研究者番号：60613867

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、ドイツ語の否定表現として代表的な副詞nicht及び不定代名詞keinが歴史的にそれぞれどのように成立し発展してきたのかについてコーパスを用いて考察した。具体的には、古高ドイツ語での話法の助動詞に対する否定副詞の作用域や、中高ドイツ語における単独否定と累加否定の意味論上の相違について示した。また、中高ドイツ語の否定辞neは接続法とともに補文標識としての役割があることを明らかにした。さらに、keinは古高ドイツ語では否定極性表現であり、中高ドイツ語期に否定の意味を持つようになったこと、また、keinにもnichtの通時的変化と比較し得るサイクリックな変化があることを提示した。

研究成果の概要(英文)：In this study, the evolution of the sentential negative adverb nicht and the negative indefinite pronoun kein in German was investigated using historical corpora. In particular, the following themes were discussed and explained: the scope of sentential negation with respect to modal verbs in Old High German (OHG), the semantic differences between mono-negation and negative concord in Middle High German (MHG), and the function of the negative preverbal particle ne in MHG, which works as a complementizer together with the subjunctive. It was also shown that kein was a negative polarity item in OHG and then obtained the negative meaning in the MHG period, and that the indefinite pronoun had a cyclic change comparable to the diachronic development of nicht.

研究分野：ドイツ語学

キーワード：否定 文法化 話法の助動詞 アスペクト 接続法 従属文 古高ドイツ語 中高ドイツ語

### 1. 研究開始当初の背景

ドイツ語は、歴史的に見て、同一文中にある複数の否定要素が調和的に否定を表す言語体系から互いに相殺される言語体系へと変化したことが知られている。本研究課題では、否定表現の中で代表的な文否定の副詞 nicht、及び、同様に文否定の機能をもつ不定代名詞 kein の成立と発展を手がかりに、否定という概念の言語表現が通時的にどのように変化したのかを考察することを目指した。また、否定の語彙要素が他の文要素の解釈に及ぼす影響、いわゆる否定の作用域についても明らかにすることを企図した。

### 2. 研究の目的

本研究課題は、文否定の役割を持つ副詞 nicht と不定代名詞 kein の意味論的・統語的ふるまいの通時変化を考察することを目指すとした。具体的には、以下の3つのテーマについて検討することを目指した。

(1) Jespersen's cycle として知られる否定表現の発展形式は、否定辞が1つの段階、否定辞を補強するような語彙要素が導入された段階、補強語が本来の否定辞に代わり否定の機能を担うようになった段階の3つを繰り返すと考えられている。ドイツ語では、動詞の直前に置かれる否定辞 ni/ne の段階、「何もない」を表す古高ドイツ語の名詞 niwiht が否定辞を補うかたちで用いられるようになった累加否定の段階、そして、niwiht が ni/ne に代わり文否定を担うようになった段階に分類できる。これらの段階は直線的に移行するのではなく、部分的に重なり合うことが知られている。すなわち、同一テキストの中で、ni あるいは niwiht による単独否定も ni と niwiht による累加否定も用いられている(累加否定では二つの否定要素が互いに打消し合わずに文全体が否定される)。このような言語上の事実から次の問題提起をすることができる。

niwiht による否定の強化はどのような統語的環境で好まれたのだろうか。

ni/ne あるいは niwiht による単独否定がそれぞれ優勢となる文脈とは何か。

niwiht という語が由来するところの wiht (「あるもの」を表す古高ドイツ語の名詞)も否定辞 ni/ne と共起する傾向があるが、それはどのような場合か。

本テーマでは、古高・中高ドイツ語期のコーパスを分析し、単独否定・累加否定がそれぞれ現れやすい統語的・意味論的条件について検討する。

(2)現代ドイツ語の kein の前身は、「ある何か」という肯定の意味をもつ古高ドイツ語の不定代名詞 thehein であり、この代名詞は肯定でない文脈(疑問文や仮定文、主文が否定や禁止・阻止を表す場合の従属文等)に現れるが、それ自体は否定を表さない否定極性表

現であった。中高ドイツ語では dehein と綴られ、この代名詞だけで否定を表すことが可能であり、肯定の意味でも否定の意味でも用いられていたことが知られている。kein の通時変化に関し、以下の3点についてコーパスを用いて検討・考察を行う。

中高ドイツ語の dehein が肯定の意味、ないしは否定の意味をもつと解釈されるのはそれぞれどのような統語的環境においてであるか。

「あるもの」を表す不定代名詞が否定の意味をもつようになったプロセスにはどのようなメカニズムが働いているのだろうか。

現代ドイツ語の文否定の副詞 nicht は上記の(1)で言及した Jespersen's cycle とよばれる変化を経てきたと考えられているが、kein も nicht と同様にサイクリックな発展をしてきたといえるだろうか。

(3)否定の作用域に入るか否かで文全体の解釈が異なってくるものに話法の助動詞があるが、現代ドイツ語では、話法の助動詞に対する否定の作用域は必ずしも一定でない。否定が話法の助動詞にかかる広い作用域か、本動詞を含む不定詞句にかかる狭い作用域かは、話法の助動詞の解釈や文脈によって異なる。本テーマでは、古高・中高ドイツ語期における話法の助動詞と否定の作用域について検討する。その際、否定の作用域を決めるものは何であるかに特に留意して考察する。

### 3. 研究の方法

本研究課題は、主として用例の調査と二次文献資料の批判的検討から構成された。理論的な考察が最終目標であったが、独自のコーパス分析に基づく統計的データを十分に考慮しながら論を展開していくことを目指した。

また、本研究課題ではドイツ語の通時的な研究を目指しつつも、比較言語学的な視点を積極的に取り入れることを試みた。特に、下記の「4. 研究成果」の(1)及び(2)では、ドイツ語のある言語現象を他の言語における同じような現象と対照することで、説明の枠組みを見出すことができたと考える。

さらに、研究の遂行面に関わることであるが、ドイツ語に対し歴史的な観点からアプローチする研究集会に参加・発表、意見交換をすることで、個々の具体的な研究課題に対してだけでなく、研究の方針・方向性に対しても、新たな着眼点を得ることができるよう努めた(特に下記の「5. 主な発表論文等」〔学会発表〕のと がこれに当たる)。

### 4. 研究成果

言語の通時変化を考察する際には「文法化」という概念がキーワードとなる。本研究課題でも副題でその言葉を用いているが、4年間の研究期間の初めに、「文法化」という概念について検討した。

文法化とは語彙的要素が文法的要素へと変化することであると定義できる。この変化は漸進的であり、語彙と文法という両極の間に中間段階があるという見解が主流である。しかし、語彙と文法がそれぞれ、有限の意味素性を用いて外的世界を分類する機能、外的世界に対する話者の見方を付与する機能をもつとするならば、語彙と文法とは本質的に異なるため、その中間段階は想定し難い。この語彙機能と文法機能の区別の重要性は非デカルト派言語学の中心的テーゼの一つである。一方、日本語の文法理論を提唱した時枝誠記もその「詞辞論」で非常に近い考え方を示している。語彙と文法の二大区分について、現代の非デカルト派言語学の立場を代表する Elisabeth Leiss 『Sprachphilosophie』(2012)と時枝の『国語学原論』(1941)・『日本文法口語篇』(1950)を中心に比較・検討し、文法化についての新たな見方を示すことを目指した(下記の「5. 主な発表論文等」〔学会発表〕と〔雑誌論文〕を参照)。

次に、上記の「2. 研究の目的」の(1)~(3)で述べたテーマにおいて、それぞれ以下の成果が得られた。

(1)現代ドイツ語では、一般的に、文は副詞 nicht を用いて否定される。nicht の中高ドイツ語でのかたちは niht である。中高ドイツ語には、niht による単独否定、動詞の直前の否定辞 ne による単独否定、そして ne と niht による累加否定の3つのタイプがある。これらの文否定のタイプについて、次の2点を検討した。

中高ドイツ語では単独否定 niht と累加否定 ne...niht が頻度上、拮抗している。niht による単独の否定表現が増加してきた中高ドイツ語期において、どのような文脈で ne...niht が保たれるかについて意味論的に説明することを試みた。コーパスとして『ニーベルンゲンの歌』を分析し、先行研究で指摘されているように、累加否定は話法の助動詞と多く共起されることが統計的に確認できた。また、コーパス分析により、累加否定は不定詞句の未完了アスペクトと相関があるということが分かった。一方、文が niht のみによって否定されている場合、このような相関関係は見られなかった。メレオロジー(部分と全体の関係に関する学説)の観点から見ると、否定されているのは、不定詞句が表す出来事それ自体ではなく、出来事の完了であると考えられる。累加否定と不定詞句の未完了アスペクトとの相関関係は、不定詞句の命題を表す部分と話法の助動詞のモダリティを表す部分とにそれぞれ否定の標識がつくと考えることで説明し得る(下記の「5. 主な発表論文等」〔学会発表〕と〔雑誌論文〕を参照)。

中高ドイツ語では、否定辞 ne は、niht や ne...niht と比べ出現頻度が低いことが知られているが、ne のみによる否定はどのような

統語的・意味論的環境に残っているのかについて検討した。コーパス分析には『ニーベルンゲンの歌』を用いた。その結果、niht や ne...niht とは対照的に ne は従属文中で多用されること、そのような従属文は従属接続詞をもたず、定動詞の位置が平叙文と同様、第2位であること、その際、定動詞は接続法の形をとることが非常に多いことなどが統計的に確認できた。また、ne のみによる否定は、独立文では特定の動詞とのみ共起すること、一方、従属文では、条件や除外を表す文の中や、否定表現としては余剰な「並列的否定」として用いられることが分かった。並列的否定はフランス語やスペイン語等にも見られることが先行研究から知られている。このことから示唆を得て、中高ドイツ語の ne には一種の補文標識としての機能があることを示した。また、この補文標識の出現は先行文における否定が引き起こすと考えられることや ne と共起する接続法にも同様の機能があることを示した(下記の「5. 主な発表論文等」〔学会発表〕と〔図書〕を参照)。

(2)現代ドイツ語の否定の不定代名詞 kein の通時的変化について、次の2点を検討した。

kein の前身は、古高ドイツ語では thehein であり、中高ドイツ語では dehein である。thehein と dehein が現れる統語的環境と出現頻度を『オトフリートの福音書』(古高ドイツ語)及び『ニーベルンゲンの歌』(中高ドイツ語)を用いて調査した。その結果、thehein は否定極性表現であること、一方、dehein にはそれ自体で否定を表す用例が約25%あり、機能が否定の領域にシフトしていることが分かった。dehein を否定語であると仮定すると、肯定でないが否定でもない文脈に現れることと矛盾するように見えるが、そのような dehein は、主文に否定が含まれていたり、主文の動詞が禁止や阻止を表す統語的環境にあることが分かった。比較言語学的な観点からも、dehein のような「余剰な」否定表現は主文の否定的要素によって引き起こされると考える方が、文脈によって肯定の意味あるいは否定の意味をもつとするよりも一貫性があるといえる。

また、thehein/dehein が肯定の代名詞から否定の代名詞へと変化した要因として、不定代名詞の体系の構造的変化が考えられる。現代ドイツ語の不定冠詞 ein は、古高ドイツ語では、特定のものを表し、肯定の文脈に現れるが、中高ドイツ語では不定冠詞とほぼ同様の機能を持ち、文脈に依存しない。ein の不定冠詞としての文法化によって thehein/dehein との機能上の重複が生じたため、元来、肯定でない文脈・否定の文脈と相関のあったこの代名詞を否定表現と捉える解釈が進んだと考えられることをテーゼとして示した。(「5. 主な発表論文等」〔学会発表〕と〔図書〕を参照)。

Jespersen's cycle とは、動詞の前に置か

れた否定語を強調するために、動詞の後に何らかの語が付け加えられ、それが否定語と再解釈されて、もともとの否定語に取って代わる一連の通時的变化であると先行研究では定義されている。現代ドイツ語の文否定の副詞 nicht はこの変化を経てきたと考えられている。一方、kein の前身である thehein/dehein は nicht のように必ずしも否定文だけに現れるわけではない。また、dehein と共起する否定語は動詞の前に置かれた否定辞 ne だけとは限らない。さらに、dehein や kein は文否定の機能を持つとはいえ、あくまで名詞句を構成する一要素である。これらの点で kein の通時的变化は nicht の歴史的変化と並行しているとはいえない。しかし、特定の否定語に限定せず、文否定という抽象的な意味の実現がある否定語から別の否定語へと移行したと考えるならば、kein の歴史にも一種のサイクリックな発展を認めることができることを示した(下記の「5. 主な発表論文等」〔雑誌論文〕を参照)。

(3) 否定の下では話法の助動詞の解釈と本動詞のアスペクトの相関性が逆転することが先行研究から知られている。すなわち、完了相が認知的モダリティの読み、未完了相が義務的モダリティの読みの標識となる。話法の助動詞と否定の作用域について、古高ドイツ語期の『オトフリートの福音書』を分析した結果、話法の助動詞は義務的モダリティとして解釈し得るものばかりであったが、本動詞を含む不定詞句のアスペクトと否定の作用域には相関関係があることが分かった。つまり、否定が話法の助動詞にかかる広い作用域(上位否定)は、不定詞句が未完了相であることと、一方、否定が不定詞句にかかる狭い作用域(下位否定)は不定詞句が完了相であることと相関する。すなわち、否定の作用域は語彙によってでもなく、語順によってでもなく、本動詞のアスペクト、正確には、不定詞句全体が表すことがらに時間的終点があるかどうかによって決まってくることを明らかにした(「5. 主な発表論文等」〔学会発表〕と〔雑誌論文〕を参照)。なお、この論考は第13回日本独文学会賞(ドイツ語論文部門)を受賞した。

#### 5. 主な発表論文等 (研究代表者には下線)

〔雑誌論文〕(計4件)

西脇麻衣子:「ドイツ語の否定表現の通時的变化 nicht、kein、否定のサイクル」  
、詩・言語(重藤実教授 定年退職記念号) 第83号、2017年、pp.27-43、査読有

Maiko Nishiwaki: “Zur Mehrfachnegation im Mittelhochdeutschen - aus mereologischer Perspektive - ”、Neue

Beiträge zur Germanistik (日本独文学会欧文誌) Band 14 / Heft 1、2015年、pp.124-142、査読有

Maiko Nishiwaki:

“Nicht-cartesianische Reflexionen über die Sprache aus japanologischer Sicht ”、(Shin Tanaka 編)Linguistische Sprachphilosophie:

Auseinandersetzung mit Sprache aus Sicht der Linguistik (日本独文学会研究叢書) 104号、2014年、pp.32-45、査読無

Maiko Nishiwaki: “Skopus der Negation bei Modalverben und (Nicht)Telizität des Infinitivkomplements im Althochdeutschen ”、Neue Beiträge zur Germanistik (日本独文学会欧文誌) Band 13 / Heft 1、2014年、pp.221-240、査読有

〔学会発表〕(計5件)

Maiko Nishiwaki: “Zur Diachronie von kein - ein Wandel vom positiven zum negativen Indefinitum - ”、国際研究集会 “6. Diskussionsforum Linguistik: Synchronie und Diachronie ”、2016年5月20日、チューリッヒ大学(スイス)

Maiko Nishiwaki: “Negation und Konjunktivgebrauch im Mittelhochdeutschen - am Beispiel des Nibelungenliedes - ”、日独言語学ワークショップ “Japanisch-deutscher Workshop Linguistik ”、2015年8月22日、ミュンヘン大学(ドイツ)

西脇麻衣子:「否定呼応の意味論 - 中高ドイツ語を中心に」、日本独文学会2014年秋季研究発表会、2014年10月11日、京都府立大学(京都市左京区)

Maiko Nishiwaki: “Zum Skopus der Negation bei Modalverben im Althochdeutschen ”、比較ゲルマン語学国際若手ワークショップ “Junge Altgermanistik ”、2014年2月7日、チューリッヒ大学(スイス)

Maiko Nishiwaki:

“Nicht-cartesianische Reflexion über Sprache aus japanologischer Sicht ”、日本独文学会2013年秋季研究発表会 シンポジウム VIII (Linguistische Sprachphilosophie:

Auseinandersetzung mit Sprache aus Sicht der Linguistik) 2013年9月29日、北海道大学(札幌市北区)

〔図書〕(計3件)

Shin Tanaka / Elisabeth Leiss / Yasuhiro Fujinawa / Werner Abraham (編): Thetik-Kategorik und OV-Varianz im Deutschen und Japanischen: Diskussionen aus der

Sommerakademie 2015 zur  
Germanistischen Linguistik der Munich  
International Summer School  
[Linguistische Berichte Sonderheft  
24]、Helmut Buske Verlag、2017 年秋刊  
行予定 (収録論文: Maiko  
Nishiwaki: “Negation und  
Konjunktivgebrauch im  
Mittelhochdeutschen - am Beispiel des  
Nibelungenliedes”、総頁数 18)、査読  
有  
Sonja Zeman / Martina Werner / Benjamin  
Meisnitzer (編): Im Spiegel der  
Grammatik. Beiträge zur Theorie  
sprachlicher Kategorisierung  
[Stauffenburg Linguistik 95]、  
Stauffenburg Verlag、2017 年 (収録論  
文: Maiko Nishiwaki: “Zur Diachronie  
von *kein*: Ein Wandel vom positiven zum  
negativen Indefinitum”、pp.69-84)、  
査読有  
Susann Fischer / Tanja Kupisch / Esther  
Rinke (編): Definiteness Effects:  
Bilingual, Typological and Diachronic  
Variation、Cambridge Scholars  
Publishing、2016 年 (収録論文: Werner  
Abraham / Maiko Nishiwaki: “Modal  
verbs in German and definiteness  
effects on the subject argument -  
focusing on modern Standard German  
*sollen* and Middle High German *suln*  
'shall' ”、pp.244-277)、査読有

## 6 . 研究組織

### (1) 研究代表者

西脇 麻衣子 (NISHIWAKI, Maiko)

東京医科大学・医学部・講師

研究者番号: 6 0 6 1 3 8 6 7